

# 高校生と大学生におけるアイデンティティ達成度の個人差と自伝的記憶との関連性

山本晃輔

## Relationship between Individual Differences in Self-identity Achievement and Autobiographical Memories among High-school and University Students

YAMAMOTO Kohsuke

### Abstract

This paper examines the relationship between individual differences in self-identity achievement and autobiographical memories of high-school and university students. For analysis, 45 high-school students and 44 university students completed an identity scale (Shimoyama, 1992) to assess levels of self-identity development. Participants were then asked to recall autobiographical memories and rate memory characteristics (e.g., importance). Participants with a higher level of self-identity achievement recalled more important, more emotional, and more positive memories than did participants with a lower level of self-identity achievement. Differences between high-school students and university students were not observed. Findings were interpreted in terms of the self-memory system (Conway, 2005; Conway & Pleydell-Pearce, 2000).

**Keywords** : Identity, Autobiographical memory, Self-memory system

キーワード : アイデンティティ, 自伝的記憶, 自己-記憶システム

### I. 問題と目的

近年、フリーターやニート (NEET; Not in Education, Employment, or Training), SNEP (Solitary Non-Employed Persons) といった青年期の発達課題である職業選択や社会参加, 自立などに関連した社会的な問題に多くの注目が集まっている。このような問題の背景には労働環境などの様々な要因が考えられるが, その1つとして, 青年期の自己の

---

平成27年1月7日 原稿受理

大阪産業大学 人間環境学部文化コミュニケーション学科講師

発達における問題が指摘されている（下村, 2011）。無業で何もしていないニートは、それ以外の若者と比べて自己を支える自尊感情が低いことが示されており、キャリアガイダンスなどを通して自己を見つめ直し、自尊感情を高めることにより、アイデンティティの達成をサポートすることが就労支援につながると考えられている（下村, 2012）。

自己やアイデンティティを巡る問題は心理学において古くから検討されてきたが、現在でも青年期を対象として広く研究されているテーマである（e.g., 林, 2014）。谷（2004）によれば、Erikson（1959 / 1973）のいうアイデンティティ（identity）とは「斉一性・連続性をもった主観的な自分自身が、まわりからみられている社会的な自分と一致するという感覚」である。我々人間は、青年期に入ると「自分は何者であるのか」という問いを自分に課し、その答えを導きだそうとする。このような過程の中で、我々はこれまでの生涯を振り返って個人的経験に関する出来事を想起し、過去の自分を再認識する。そして、過去および現在における自己と社会が認めかつ期待している自己とを統合することを通して、アイデンティティを達成させていくのである。すなわち、アイデンティティの達成において、個人が回想的に過去の出来事を振り返るという行為は極めて重要な意味をもつ。

個人における過去の出来事の記憶は、自伝的記憶（autobiographical memory）と呼ばれる。自伝的記憶は、その集合体が個人のアイデンティティを形成していると考えられており（Cohen, 1996; Conway, Singer, & Tagini, 2004）、個人が自己の同一性や連続性を保つのに、自伝的記憶は1つの本質的な役割を果たしているといえる（清水, 2011）。このような背景の中、これまでもアイデンティティの達成と自伝的記憶に関する研究がいくつか行われてきた（e.g., 佐藤, 1998）。

従来の研究では、アイデンティティと自伝的記憶とが互いに影響し合う双方向の関係性が主張されてきた（e.g., Conway, 2005; Conway & Pleydell-Pearce, 2000; Wilson & Ross, 2003）。この主張によれば、アイデンティティの達成度に応じて、それぞれに想起される自伝的記憶の質や特性が変動し、逆に、自伝的記憶が想起されることによってアイデンティティの達成度が影響を受けることになる。このような主張を支持する研究では、青年期や高齢期の参加者を自我同一性地位や自我同一性達成度に基づいて群分けし、それぞれに想起される自伝的記憶の特徴等が検討されてきた。たとえば、植之原（1993）は、「生きていく上で大切なこと」等に関する意見（命題）を参加者に尋ねた上で、そのように考えるようになったきっかけとなる自伝的記憶の想起を求めた。その結果、自我同一性達成群の方が非達成群（e.g., 拡散群）に比べて命題と自伝的記憶との内容的な関連が強いことがわかった。その他にもアイデンティティ達成度の個人差によって、想起される自伝的記憶の想起時間（e.g., Neimeyer & Metzler, 1994）、語りの構造（野村, 2002）が異なることが報

告された。また、山本（2013）は大学生を対象として、アイデンティティの達成度によって想起される自伝的記憶の特性が異なるかどうか注目した。実験の結果、アイデンティティ達成度高群では低群と比較して、鮮明でかつ情動的であり、快で重要な自伝的記憶が想起されることが示された。

従来の研究ではアイデンティティが一定程度に発達した大学生以上を対象とした検討が多かったが、アイデンティティが未発達な年齢群であってもこれらの知見は再現されるのであろうか。下山（1992）によれば、大学2年生の方が4年生よりもアイデンティティの達成度が低いことが示されており、それに従えば、高校生ではさらにアイデンティティの達成が未発達な段階にある。もしそうであれば、高校生では自伝的記憶とアイデンティティ達成との双方向の関係性がいまだ十分に機能しないため、アイデンティティの達成度の個人差による影響が生じない可能性が考えられる。しかし、大学生と高校生におけるアイデンティティ・スタイルの比較研究においては、両群で顕著な違いがみられないことが報告されており（前田・新見, 2010）、高校生であっても、大学生と同程度の自己に関する処理が行われている可能性は否定しえない。もしそうであるとすれば、大学生を対象として見出されてきたアイデンティティの達成度の個人差と自伝的記憶特性との関連性は、高校生においても同様にみられることが予測されるだろう。

そこで本研究では、高校生と大学生を対象にアイデンティティ達成度の個人差が想起される自伝的記憶の特性にどのように影響するのかを検討する。アイデンティティ達成度の測定については様々な方法があるが（谷, 2014）、本研究では先行研究（山本, 2013）に倣い、個人のアイデンティティ達成の程度における感覚を測定するものとして、下山（1992）によるアイデンティティ尺度を採用する。この尺度を用いて、実験参加者のアイデンティティの達成度を測定し、その値から大学生と高校生のそれぞれに達成度の高群と低群を設定する。そして、自伝的記憶の想起を求め、アイデンティティ達成度の高低群間で想起された記憶の特性が異なるのかどうかについて検討を行う。このような検討によって、高校生でも大学生と同様にアイデンティティと自伝的記憶との双方向の関係性が確認されるのかどうかを検証する。

## II. 方法

**参加者** 高校生44名（男性19名・女性24名、不明1名、平均年齢16.58歳）、大学生45名（男性21名・女性24名、平均年齢19.80歳）が参加した。

**調査用紙** 調査用紙はA3サイズで両面印刷であった。片面には自伝的記憶の想起課題

シートが印刷され、別の片面には下山（1992）によるアイデンティティ尺度（4件法）20項目が印刷されていた。アイデンティティ尺度は、アイデンティティの基礎とアイデンティティの確立の各10項目2因子から構成される。アイデンティティの基礎に関する項目は、アイデンティティ形成の基礎となる自己の安定が得られず、不安や孤独におそわれる気持ちを反映した内容を示す（e.g.,「私の心は、とても傷つきやすく、もろい」）。一方、アイデンティティの確立に関する項目は自己の主体性や自己への信頼が形成されていることを示す（e.g.,「私は十分に自分のことを信頼している」）。評定は「よく当てはまる（4）」、「どちらかといえば当てはまる（3）」、「どちらかといえば当てはまらない（2）」、「全く当てはまらない（1）」の4件法であった。自伝的記憶の想起課題シートには、想起内容の記述欄と評定値が記載されていた。想起内容の記述欄では、出来事が生じた時期および想起された出来事の内容の自由記述を求めた。ただし、倫理的な配慮から、想起した内容を参加者が記述したくない場合には空欄のままよいことを記載した。想起された内容についての評定値として、感情喚起度（その出来事からは全く感情が呼び起こされない（1）-強い感情が呼び起こされる（5））、快不快度（その出来事の感情は不快である（1）-快である（5））、想起頻度（その出来事はほとんど思い出さない（1）-1ヶ月に1回程度思い出す（5））、鮮明度（その出来事の記憶はぼんやりとしている（1）-はっきりとしている（5））、重要度（その出来事は自分にとって全く重要ではない（1）-とても重要だ（5））の5種類の評定を求めた。

**手続き** 高校生、大学生ともに授業時間の一部を用いて実験が行われた。両群における手続きは同一であった。まず、参加者には負担のある場合にはいつでも調査から離脱できることを説明し、参加の同意を確認した。アイデンティティ尺度を実施した後、手がかり語から中学生、あるいは高校生時代の出来事を1つ思い出すように教示した。手がかり語として、山本（2013）の研究で使用された「公園」、「野球」、「フォークダンス」、「クリスマス」、「レミオロメン」、「GReeeeN」、「コブクロ」の7つを選定した。このうち、「レミオロメン」、「GReeeeN」、「コブクロ」はヴォーカルグループ名であった。実験後、研究目的についてのデブリーフィングを行った。実験に要した時間は15分程度であった。

### Ⅲ. 結果

**アイデンティティ尺度による群分け** 大学生と高校生におけるアイデンティティ尺度の合計平均値を算出し、Table 1に示した。なお、下位尺度であるアイデンティティの基礎に関する因子の項目は逆転項目として処理した。高校生と大学生でアイデンティティ尺度

の合計平均値に違いが見られるかどうかを調べるために1要因分散分析を行った結果、大学生が高校生よりもアイデンティティ尺度合計値が高いことが示された ( $F(1,87) = 72.77, p < .001$ )。年齢の増加に伴ってアイデンティティ尺度得点が増加する結果は先行研究(下山, 1992)を追認するものであり、予測通りの結果であった。

上記で算出した高校生と大学生におけるそれぞれのアイデンティティ尺度の合計平均値を基準としてアイデンティティ達成度高群、低群を設定した。各群におけるアイデンティティ尺度の合計平均値をTable 1に示す。

Table 1 全体および各群におけるアイデンティティ尺度合計平均値

大学生			高校生		
高群 ( $n=22$ )	低群 ( $n=15$ )	全体 ( $n=45$ )	高群 ( $n=17$ )	低群 ( $n=25$ )	全体 ( $n=44$ )
64.55 (4.41)	55.53 (1.26)	60.51 (5.18)	56.76 (4.91)	42.84 (3.39)	48.46 (7.77)

※ ( ) 内はSD

**自伝的記憶に関する基礎データの分析** 自伝的記憶の想起内容欄における空欄は大学生で0ケース(0%)、高校生で4ケース(9.09%)であった。いずれのケースも評定値はすべて記入されていたことから、想起を失敗したケースではないものと判断し、すべての参加者におけるデータを分析の対象とした。手がかりの使用率については、大学生では“公園”8ケース(17.78%)、“野球”11ケース(24.44%)、“フォークダンス”5ケース(11.11%)、“クリスマス”7ケース(15.56%)、“レミオロメン”5ケース(11.11%)、“GReeeeN”1ケース(2.22%)、“コブクロ”8ケース(17.78%)であり、高校生では、“公園”16ケース(36.36%)、“野球”4ケース(9.09%)、“フォークダンス”0ケース(0%)、“クリスマス”13ケース(29.55%)、“レミオロメン”3ケース(6.82%)、“GReeeeN”4ケース(9.09%)、“コブクロ”2ケース(4.55%)、不明2ケース(4.55%)であった。想起内容として、たとえば“野球”手がかりを用いた大学生では、「毎年甲子園に高校野球の応援に行っていた。吹奏楽部だったので楽器や踊りで応援していた。」といった例がみられ、同じ手がかりを用いた高校生では、「中学の時に球技大会で野球をした。結果、1勝1敗で悔しい思いをした。」といった例がみられた。

**群間における記憶特性の違い** 大学生および高校生におけるアイデンティティ達成度高低群ごとに想起された自伝的記憶に関する評定平均値を算出し、大学生・高校生とアイデンティティ達成度高低群をそれぞれの要因とする実験参加者間2要因分散分析を行った(Table 2)。その結果、アイデンティティ達成度高低群要因における主効果がすべての評定値で有意となり、アイデンティティの達成度高群では低群よりも感情喚起度が高く、快であり、想起頻度が多く、鮮明でかつ重要な自伝的記憶が想起されることがわかった。そ



の他の主効果、交互作用は見られなかった。高校生でも、大学生と同様の結果が示され、また両群に明確な差がみられなかったことから、アイデンティティ達成度の個人差と自伝的記憶との関連性は高校生においても確認されることがわかった。

Table 2 高校生と大学生における各群の評定平均値およびSDと分析結果

評定値	大学生		高校生		F値 (1,75) 高低群主効果
	高群 (n=22)	低群 (n=15)	高群 (n=17)	低群 (n=25)	
感情喚起度	4.23 (1.08)	3.33 (1.35)	3.53 (1.19)	2.92 (1.23)	6.97*
快不快度	4.13 (1.22)	3.53 (1.45)	4.41 (0.77)	3.72 (1.31)	5.07*
想起頻度	2.73 (1.25)	2.00 (1.10)	3.06 (1.51)	2.40 (1.33)	5.05*
鮮明度	4.09 (1.16)	3.33 (1.25)	3.94 (1.35)	3.12 (1.51)	6.30*
重要度	4.32 (0.97)	3.13 (1.26)	3.65 (1.28)	3.20 (1.22)	8.58***

注. ( ) 内はSD, \* $p<.05$ , \*\*\* $p<.005$

#### IV. 考察

本研究では、高校生と大学生を対象に、アイデンティティ達成度の個人差と自伝的記憶特性との関連性について検討した。その結果、大学生の方が高校生よりもアイデンティティの達成度は高いが、高校生でも大学生と同様に、アイデンティティ達成度高群が低群と比較して、感情喚起度が高く、快であり、想起頻度が多く、鮮明でかつ重要な自伝的記憶が想起されることが示唆された。すなわち、アイデンティティと自伝的記憶における双方向の関係性は、アイデンティティの達成がまだ十分ではない高校生においても確認されることがわかった。高校生でも、自伝的記憶の想起をうまく利用し、アイデンティティの達成に貢献している可能性が示唆されたといえる。

従来の研究では、自己と記憶とが相互に関連することが重視されたConway (2005), Conway & Pleydell-Pearce (2000) による自己-記憶システム (Self-Memory System) に基づいた解釈が行われてきた。Conway (2005) によれば、自己の過去に関する様々な情報は抽象度の異なる階層構造を形成し、貯蔵されている。階層は大別して自伝的知識 (autobiographical knowledge) とエピソード記憶 (episodic memory) からなる。このうち自伝的知識はさらに細分化されており、抽象度の高い上位から順に、ライフストーリー (life story: 個人に関する事実, 評価, 自己イメージ), テーマ (theme: 仕事や対人関係等に関する主題), 人生の時期 (lifetime period: 大学時代など時系列に基づいた情報), 一般的な出来事 (general events: 特定の時間, 場所の出来事や何度か繰り返し, 経験した出来事の知識) である。そして、自伝的知識のさらに下層に、最も具体的で詳細な情報

として、出来事を通して経験した感覚知覚情報や感情情報などのエピソード記憶が貯蔵されている。

自伝的記憶が想起される際には、手がかりに基づいて上位の階層から下位の階層に向けて、情報の探査と照合が循環的に繰り返される。それによって、次第に自伝的記憶構造内の情報が活性化され、ここで活性化された情報それ自体が自伝的記憶となり、想起に至る。その際には、現在の自分の目標と概念的自己（conceptual self）から構成される作動自己（working self）によって、自己イメージと一致した自伝的記憶内における情報の活性化が制御、調整される。言い換えれば、想起手がかりによって活性化され得る情報があったとしても、それが自己イメージと矛盾する場合には最終的に想起される記憶には含まれない。このように、自伝的記憶の想起には自己イメージが極めて重要な役割を果たすのである。

Conway（2005）の理論に基づき、たとえば山本（2013）は自己の状態の1つとしてアイデンティティ達成度を操作し、その高群が低群と比較して鮮明で情動的な自伝的記憶が想起された実験結果を以下のように解釈した。アイデンティティの達成度が高い場合には、自己イメージが具体的でかつ明確であるため、それと一致する自伝的記憶内の情報の活性化が促進される。それに対して、アイデンティティの達成度が低い場合には、具体的な自己イメージが定まっていないため、自伝的記憶内における情報の活性化が抑制される。それゆえに、アイデンティティの達成度高群が低群よりも鮮明で情動的であるなどの詳細な自伝的記憶が想起されると解釈された。

本研究では高校生がアイデンティティの発達においていまだ未成熟であるため、上記のようなアイデンティティと自伝的記憶との双方向の関係性がみられないのではないかと推測した。しかし、実際には高校生においても大学生と同様のパターンが確認されたことから、比較的早期の段階から両者の関係性は示されることがわかった。すなわち、アイデンティティの発達が十分ではない段階においても、比較的その発達が進んでいる青年では、すでに自己イメージが明確であるため、詳細な自伝的記憶を想起し、自己理解や自己の統合に役立てているのではないかと考えられる。

本研究ではこれまで検討されてこなかった高校生を対象として、アイデンティティと自伝的記憶との双方向の関連性が再現されることを新たに示したといえる。しかし、本研究にはいくつかの問題点も考えられる。以下ではそれらにふれながら、今後の課題について議論したい。

第1に、本研究では大学生と高校生との明確な差がみられなかったが、その理由として、本調査手続きでは、高校生の特徴を十分に抽出できなかった可能性がある。たとえば、前

田・親見（2010）では大学生と高校生のキャリア意識とアイデンティティ・スタイルについて検討しているが、その際には大学生用と高校生用の2種類の尺度を利用している。大学生と高校生でも言語的な表現理解などに若干の違いがあるため、本来は適切な表現に基づいた尺度が使用されるべきであろう。加えて、本研究で用いた想起を促すための手がかり語は、山本（2013）で選定されたものであるが、こちらも基本的には大学生によって想起された自伝的記憶の内容から抽出されたものである。また、時代背景に依存する可能性がある手がかりが一部使用されていた点は否めない。そのため、現在の高校生の想起を方向づける手がかりとして必ずしも適切であるとはいえないだろう。これらの点については今後の課題としたい。

第2に、本研究では思い出そうという意図を伴った想起事態のみを対象としたが、近年では思い出そうという意図を伴わない無意図的想起（involuntary remembering）に関する研究が盛んに行われている（e.g., 関口・森田・雨宮, 2014）。すでに、山本（2013）の研究ではアイデンティティ達成度の個人差と無意図的に想起される自伝的記憶との関係性について検討が行われており、意図的想起事態と同様にアイデンティティ達成度が高い群は低い群と比較して、重要で情動的な自伝的記憶が想起されるという結果が示されている。無意図的想起の研究においては、個人差に焦点をあてた検討の必要性が指摘されており（e.g., 神谷, 2014; 山本, 2014）、また、発達の要因を組み込んだ研究はいまだ少ない。本研究では高校生を対象としたが、今後は小学生や中学生、さらには高齢者を対象とした無意図的想起とアイデンティティ達成度との関連性についての検討を行い、発達要因による影響について明らかにしていきたい。

第3に、本研究ではアイデンティティの達成度と自伝的記憶の想起とによる双方向の関係性を重視しているが、回想法などの応用的な側面を考慮した場合、想起によってアイデンティティの達成が促進されるという方向性については今後検討すべきである。すでにいくつかの試みが行われており、たとえば山本（印刷中）は、重要度の高い自伝的記憶の想起を求めると、重要度の低い自伝的記憶が想起される場合と比べて、想起前よりも想起後の方がアイデンティティの達成度が促進される可能性を指摘している。これまでも青年期を対象とした回想法の試みが行われているが（e.g., 野村・橋本, 2006）、今後はこのような応用可能性を視野に入れた研究を行う必要がある。



## V. 引用文献

- Cohen, G. *Memory in the real world*. (2nd ed.). UK: Psychology Press, 1996.
- Conway, M. A. "Memory and the self." *Journal of Memory and Language*, vol. 53, 2005, pp.594-628.
- Conway, M. A., and C. W. Pleydell-Pearce. "The construction of autobiographical memories in the self-memory system." *Psychological Review*, vol. 107, 2000, pp.261-288.
- Conway, M. A., J. A. Singer, and A. Tagini. "The self and autobiographical memory: Correspondence and coherence." *Social Cognition*, vol. 22, 2004, pp.491-529.
- Erikson, E. H. "Identity and the life cycle" International Universities Press. 1959, (小此木啓吾訳編『自我同一性：アイデンティティとライフサイクル』誠信書房, 1973年).
- Neimeyer, G. J., and A. E. Metzler. "Personal identity and autobiographical recall." In U. Neisser & R. Fivush (Eds.), *The remembering self*. Cambridge: Cambridge University Press, 1994. pp.105-135.
- Wilson, A., and M. Ross. "The identity function of autobiographical memory: Time is on our side." *Memory*, vol. 11, 2003, pp.137-149.
- 神谷俊次. 「ふと浮かぶ過去－自伝的記憶の無意図的想起」(関口貴裕・森田泰介・雨宮有里編著, 『ふと浮かぶ記憶と思考の心理学』, 北大路書房, 2014年). 25-38ページ.
- 前田健一・親見直子. 「高校生と大学生のキャリア意識とアイデンティティ・スタイル」『広島大学大学院教育学研究科紀要』, 第59巻, 2010年, 65-73ページ.
- 佐藤浩一. 「「自伝的記憶」研究に求められる視点」『群馬大学教育学部紀要 人文・社会科学編』, 第47巻, 1998年, 599-628ページ.
- 清水寛之. 「自伝的記憶の発達」(子安増生・白井利明編, 『発達科学ハンドブック3 時間と人間』, 東京:新曜社, 2011年) 274-292ページ.
- 下村英雄. 「フリーター・ニートの自己」(榎本博明編, 『自己心理学の最先端－自己の構造と機能を科学する』京都:あいり出版, 2011年) 255-265ページ.
- 下村英雄. 「若者の自尊感情と若年キャリアガイダンスの今後のあり方」『ビジネス・レーパー・トレンド』, 第5巻, 2012年, 2-9ページ.
- 下山晴彦. 「大学生のモラトリアムの下位分類の研究」『教育心理学研究』, 第40巻, 1992年, 121-129ページ.
- 関口貴裕・森田泰介・雨宮有里編著『ふと浮かぶ記憶と思考の心理学』北大路書房, 2014年.
- 谷 冬彦. 「アイデンティティの定義と思想」(谷 冬彦・宮下一博編, 『さまよえる青少年の心

- ーアイデンティティの病理－発達臨床心理学的考察』京都：北大路書房，2004年）3ページ。
- 谷 冬彦. 「第2章 アイデンティティ研究の方法（1）尺度による研究」（鑑幹八郎監修，『アイデンティティ研究ハンドブック』ナカニシヤ出版，2014年）11-25ページ。
- 野村晴夫. 「高齢者の自己語りと自我同一性との関連」『教育心理学研究』，第50巻，2002年，355-366ページ。
- 野村信威・橋本 幸. 「青年期における回想と自我同一性および心理的適応の関連」『パーソナリティ研究』，第15巻，2006年，20-32ページ。
- 林 創. 「児童期および青年期の発達研究の動向」『教育心理学年報』第53巻，2014年，14-24ページ。
- 植之原薫. 「同一性地位達成過程における「事象の記憶」の働き」『発達心理学研究』，第4巻，1993年，154-161ページ。
- 山本晃輔. 「アイデンティティ確立の個人差が意図的および無意図的に想起された自伝的記憶に及ぼす影響」『発達心理学研究』，第24巻，2013年，202-210ページ。
- 山本晃輔. 「匂いと記憶－プルーム現象」（関口貴裕・森田泰介・雨宮有里編著『ふと浮かぶ記憶と思考の心理学』，2014年，北大路書房）39-51ページ。
- 山本晃輔. 「重要な自伝的記憶の想起がアイデンティティの達成度に及ぼす影響」『発達心理学研究』印刷中。